

第二代会長の「教え」を心に、力強く生きよう

上 廣 哲 治

上廣榮治第二代会長が逝去してから、やがて三か月が過ぎようとしています。その存在の大きさから埋めがたい悲しさ、寂しさを感じながら各地を回ってきた春季大会も、終盤を迎えようとしております。

この間、いつものように先師（二代会長）の講演録や著書を学び直す日々を重ねるうちに、先師の存在がこれまで以上に身近に感じられるようになってきました。姿はもうこの世にありませんが、さまざま記憶がよみがえり、先師が私の心のなかに生きていくように思われてならないのです。と同時に、私自身が前を向いて力強く生きなければならぬという気持ちにもなっていました。

漂泊の歌人、山崎方代に父を詠んだ歌があります。

私が死んでしまえば わたくしの心の父はどうなるのだろう

亡くなった人は、この世の存在ではありませんから、その姿を見ることはできません。しかし、生前に生を共にした人々の心のなかではいつまでも生きています。方代は、自分の心のなかの父を生かすにつづけるためにも、しっかりと生きていかなければならない、そう考えたのではないのでしょうか。

すでに季節は春になり、長閑な空の下で桜は満開に咲き誇っています。大自然は、人間の悲しさや寂しさに頓着することなく、大いなる季節の循環を営んでおります。冬枯れた大地には草木の新しい命が芽生え、春の暖かな日差しを受けて大きく育とうとしています。私たちも、そのように新しく大地に生き貫かなければなりません。先師最期の教え、「大自然の摂理に沿って、より善く生きよ」にしたがって、会友一丸となって、倫理の大道を力強く歩んでいこうではありませんか。

では、「大自然の摂理に沿う生き方」とは、どのようなものなのでしょう。「大自然の摂理に沿って、より善く生きる」手掛かりをどこに求めればよいのでしょうか。

先師は、「大自然の摂理」とは「この世の森羅万象を、順調に生起展開させる原理」であると説きました。この地球も、いや大宇宙をも含めてすべてが、その原理にしたがって生み出され、調和と均衡を保って運動しつづけています。当然、私たち人間もその例外ではありません。人間も大自然の摂理によって、環境や他の生物と調和すべく生かされているのです。

解剖学者の養老孟司さんは、「自然に学ぶ」というエッセイで、自然が万物をいかに外界に適合するように生かしているかを、木の葉に例をとって説明しています。

養老さんは言います。木の葉の並び方を見ると、それがどのような法則に基づいているかはわからないけれど、ある規則に基づいて並んでいるように見える。木の葉は光合成のために十分な日の光を必要としている。だとすれば葉の一枚一枚が最大の日照を受けるように配列されているにちがいない、と。

もし人間に「最大の日照を受けるには、その木は、自分の葉をどう配列すればいいか」という問題が与えられたとすれば、コンピュータに複雑な計算をさせて、その最適解を導き出せるかもしれません。

ところが自然は、そんな手間をかけることなく瞬時に、葉の一枚一枚に最大の日照を受けられる最適な位置を割り当てているのです。

養老さんは、すべての問題に対して「自然は、すでに解(答え)を与えている」と言います。私たちが自然を見て、そこに答えを探し出そうとする前に、自然は隠すことなくその答えを示しているのです。

道元(どうげん)禅師の著した『典座教訓』にも同じようなことが書かれています。『典座教訓・赴(ふ)粥(じやく)飯(はん)法(ぽう)』(講談社学術文庫)からご紹介しましょう。

道元は、「禅の修行の意味」を問うために中国に留学しました。上陸した港で、修行僧のために食事を作る「典座」役の老いた僧に出会います。その僧は、修行僧たちに美味しい水団(すいだん)を振る舞うために使う日本産の桑の実を買いに来ていたのでした。

さまざまな話をして、その僧と親しくなった道元は尋ねました。

「あなたのようなご高齢なら、典座などという煩(わづ)わしい役を離れて、坐禅修行に専念し、先人の著した仏道修行に関する本をお読みになったほうがいいではありませんか」

老僧は、笑ってこう言います。

「若いあなたは弁道(べんどう)修行がいかなることかよくわかっていないようだ」

こうした問答のち、道元は天童山(てんどうざん)景德寺(ぎんていじ)で修行することになりました。そこに先の老僧が、故郷に帰る途中、わざわざ訪ねてくれて、二人はまた対話を重ねました。

「坐禅修行の道にいそしむ者は、坐禅修行の真実の意味を知ろうと求めるものだ」

老僧が言いますと、道元はすかさず尋ねます。

「弁道(べんどう)とはいったい、いかなることでしょうか」

「徧(へん)界(がい)曾(そう)て蔵(かく)さず(あまねく世界はなにも隠すことなく、すっかりあらわれている)」

ここでも、真実は誰の目にも見えるように明らかにされているといわれます。

「大自然の摂理に沿う実践」というと、なにか特別なことを考え、特別なことをしなければならぬと、私たちは考えがちです。でも、よく見れば、問題の答えも真実も、私たちの日常生活のなかにありのままの姿で顕(あらわ)れているのです。それを見えにくくしているのは、私たちの利己的な感情や欲望であり、自分の力だけで生きられるという傲慢(ごうまん)な思い上がりの感情なのです。

自然の風景、絵画、音楽などを見聞きしたとき、私たちは、その美しさに感動することがあります。なぜそれを美と感じ、感動するのか、その理由を言葉で説明するのは困難です。それを美と感ずるのは私たちの命のリズムと大自然の摂理のリズムとが同調したからではないでしょうか。「真・善・美」といいいますが、摂理に適(かな)ったものは「正しく・善いもので・美しい」と判断できる力が私たちには備わっているのです。

ですから、利己心や強欲、傲慢な心を捨てて心を落ち着かせ、静かに自分の心の声に耳を澄ませば、何を実践すべきかという問題に対する答えは、大自然の摂理に沿って自ずから出てくるのではないのでしょうか。

先師最期の教え、「大自然の摂理に沿って、より善く生きよ」を心に深く刻んで、明るく元気に、そして笑顔で、実践を楽しんでまいろうではありませんか。それが私たちが先師にできる最高の恩返しにほかならないのです。